

# Morphology & Lexicon Forum 2013

日時 2013年9月7日(土)13:30～、8日(日)10:10～

場所 慶応義塾大学 日吉キャンパス 来往舎2F 大会議室

横浜市港北区日吉4-1-1, 東急東横線/東急目黒線/横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅 徒歩2分

<http://www.keio.ac.jp/ja/access/hiyoshi.html> (キャンパスマップ9番の建物)

7日(土) 受付13:00から

13:30-14:20	発表1	日本語の「派生的」結果構文における アスペクト限定	高橋英也 (岩手県立大学)
14:30-15:20	発表2	名詞化と動詞の他動性の各パラメーター との相関について	沈晨 (北京外国 語大学大学院)
15:20-15:40		休憩	
15:40-16:30	発表3	主観性を表す形容詞と語彙的モダリティ	長谷部郁子 (筑波大学非常勤)
16:40-17:40	招待 発表	Short love poems are easy to be read and understood.は語彙意味論からどう説明されるのか	丸田忠雄 (東京理科大学)
18:00～		懇親会 (下記参照)	

8日(日) 受付9:50から

10:10-11:00	発表4	複合動詞「V+歩く」の統語的分析に関する 一考察	秋本隆之 (中央大学大学院)
11:10-12:00	発表5	モノ名詞に付加して動作解釈を引き出す 「ひと」について	伊藤たかね(東京大学) 杉岡洋子 (慶応大学) 由本陽子 (大阪大学)
12:00-13:30		休憩 ランチ	
13:30-14:20	発表6	動作動詞句を形成する「形容詞ク形+する」 の性質と構造	田川拓海 (筑波大学)
14:30-16:00	講演	日本語の主語： 項と格と文構造	長谷川信子 (神田外語大学)

\* 懇親会(会場1Fレストラン)の申し込み先(8/28まで): 杉岡 sugioka に続けて@sfc.keio.ac.jp

\* 8日の昼食は、日吉駅ビルの東急デパート(各種お弁当)や周辺の飲食店をご利用ください。

\* 前日、9月6日(金)には、同じ会場で国立国語研究所共同研究プロジェクトのワークショップ「語の意味と統語的係わり」が開かれます。詳しくは次のサイトをご覧ください。

<http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/m-2013/20130906-016/>

問い合わせ先: MLFのサイト <http://www.intcul.tohoku.ac.jp/lingcommunic/mlf/>

世話役 由本陽子 (大阪大学) yoko に続けて@lang.osaka-u.ac.j

## 日本語の「派生的」結果構文におけるアスペクト限定

(キーワード：結果構文, 事象構造, アスペクト限定, 漸増的過程, 完全消費)

高橋英也

先行研究において、日本語における結果構文は「本来的」なものに限られると広く仮定されてきたが、実際には、非完結動詞に基づきいわゆる「派生的」な結果構文の事例は数多く存在する。

- (1) a. 太郎は、次郎に借りたマンガ本を汚く読んで返した。
- b. 太郎は、いつもデニムをクタクタに履くらしい。
- c. 「(セットした髪を) ペチャンコに叩かないでよ！」

本来的に非完結動詞である「読む」のアスペクト性が結果句の生起と共に転換されていることは、「1週間マンガ本を読んだ」と「1週間でマンガ本を汚く読んだ」における時間副詞類との共起関係からも明らかである。その一方で、「本来的」と呼ばれる結果構文に目を転じると、その振る舞いは必ずしも期待通りとは言えない。例えば、「太郎は壁を白く/真っ白に塗ったが、結局、壁は白く/??真っ白にはなっていない」のような事例においては、結果句の選択によって、結果状態への到達に関する含意に差異が認められる。また、「この花瓶は割っても割れなかった」の容認性が示すように、そもそも日本語に「真性の」完結動詞がどれほど存在するかにも疑問の余地が残る。

このように、「本来的」と「派生的」という対立的パラダイムによって、日本語の結果構文に関する事実が完全に予測されるとは言い難い。そこで、本論では、日本語の結果構文を統一的に説明する新たな分析の可能性について追究する。

議論の前提として、本論では、第一に、日本語の結果句が副詞類であるという立場をとる。第二に、三原(2008)における結果句の分類(PP であるノ形容動詞：「粉々の\*な花瓶」と AP であるナ形容動詞：「きれいな\*の部屋」)を採用する。この2つの類の結果句は、統語操作の適用可能性や、解釈における結果状態の表出の有無に関して、対照的な振る舞いを示す。ここで、結果句の統語論に関する自然な想定として、遊離数量詞の相対的位置や「そうする」による置換などの伝統的診断法から、結果句と主動詞 V が統語派生の第一段階において外的併合されると分析する。結果として、併合に課されるラベリング演算から次の(2)が導かれる。

- (2) a. ノ形容動詞(PP 結果句)は、主動詞 V の補部として認可される。
- b. ナ形容動詞(AP 結果句)は、V と共に複合主要部{A, V}を形成する。

(2)の下では、2つの類の結果句に対する統語操作の適用可能性は自明のことである。

これらの前提を踏まえた上で、「派生的」な結果構文の事例(3)を見られたい。

(3) 太郎は 次郎の背中を 次郎を アザだらけに殴った。

この対比は、目的語の性質が「派生的」な結果構文の成立に影響を与えることを示唆している。すなわち、動詞本来のアスペクト性に関わらず、行為の及ぶ対象の範囲が「限定的」である場合に、アスペクト限定が可能になると言える(cf. Rothstein (2004))。

本論では、非完結動詞に基づく事象におけるアスペクト転換の成立条件(4)を仮定した上で、日本語の結果句の機能に関して(5)を主張する。

(4) 行為を被る対象が、項限定詞として機能する(行為が対象に対して「完全消費的」に及ぶ)限りにおいて、非完結動詞に対するアスペクト転換が可能となる。

(5) 日本語の結果句は、動詞の表す行為が対象に完全消費的(全体的)に及ぶ過程を「漸増的に」修飾する副詞類である。

本論の分析では、日本語の結果構文の事象構造は基本的に PATH タイプとして捉えられるため、例えば、(英語とは異なり)日本語の結果構文が継続動詞に偏することは、全く自然に予測される。

紙幅の都合上、詳述は割愛せざるを得ないが、最後に、本論の分析がもたらす3つの帰結について簡単に触れる。第一に、「巨人が街を粉々に/\*瓦礫の山に破壊した」「巨人が街中のビル群を(次々と)粉々に/\*瓦礫の山に破壊した」に見られるような、破壊動詞に基づく結果構文形成の可否について、漸増的過程という観点から自然に説明できる。第二に、「前髪を長く切る」のような生産動詞を含む事例と、「前髪を薄くすく」のような行為動詞を含む事例における、結果状態の表出状況に関する意味的差異を、タイプシフト等の概念を用いずに捉えることができる。最後に、日本語の非完結動詞に対して PATH タイプの事象構造を認めることで、「学生はいつもコンビニに走る」や「目についた/\*どこかのトイレに走った」のような移動動詞構文に対して、経路の漸増的消費という観点から、派生的結果構文と平行的な説明を与えることができる。

#### 参考文献

三原健一 (2008) 「いわゆるナ形容詞の結果述語を巡って」金子義明ほか(編)

『言語研究の現在: 形式と意味のインターフェイス』99-114. 開拓社

Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*. Blackwell.

キーワード：名詞化 連用形名詞 他動性 行為連鎖モデル

## 1. 問題提起

日本語において、動詞の連用形が名詞として使用される。実際、どのような動詞が名詞化するのか、また、特定の構文パターンを要求するのか、項や付加詞の補足によって複合語として名詞化するのか、などといった問題は、動詞の意味とかかわりが大きいことが予想される。

本稿では、名詞化と動詞の意味との関連性を探ることを目的とする。

## 2. 動詞の他動性の各パラメーターとの相関検討

動詞の典型的な性質を、一つの連続線上で論じるものとして、他動性という概念がある。

Hopper and Thompson(1980)は、A~Jの10個のパラメーターを用いて他動性の高低について規定している。

A~Jの他動性の各パラメーターと、名詞化の関係について検討してみる。

A. 参加者について、名詞化との関係は一律には言えないところが多い。

B. 動作性に関して、相関が見られるように思われる。

(9) a. あきらめ 祈り 疑い 恨み 思い 悲しみ 考え

b. (筈) 打ち (たらい) 回し (耳) 搔き (手) 拭い (足) 拭き

(10) a. 上司に受けが悪い

b. 雨受け、新聞受け、名刺受け

C. アスペクトと F. 肯定、G. ムード、J. 目的語の個別化は全部文レベルの問題であって、動詞自体の意味に関係ないので、ここでは検討の対象から外す。

D. 瞬時性についても、相関が見られるように思われる。

(11) a. 調べ 争い いじめ 学び 助け 釣り

b. (石) 蹴り (針) 刺し (肩) 叩き (コマ) ずらし

E. 意図性について、あまり影響しないように思われる。

H. 動作主性について、動作主性の強弱に関わらず、名詞化できると見られる。

I. 目的語の影響性に関しては、名詞化の要因のうち、かなり重要なパラメーターのように思われる。

上述のことをまとめると、他動性の各パラメーターのうち、B 動作性・D 瞬時性・I 影響性が名詞化に大いに関わるように思われる。表にまとめると、次のようになる。

表 1 他動性のパラメーターと名詞化の関係

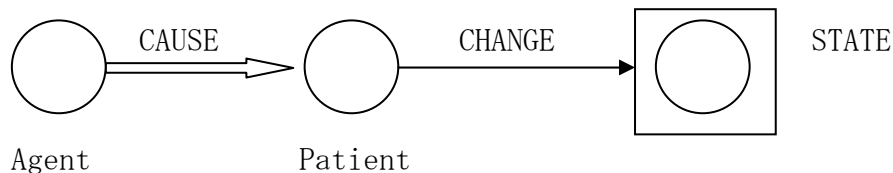
	喜ぶ	調べる	転がる	乾く	叩く	上げる
動作性	－	＋	＋＋	－	＋＋	＋＋
瞬時性	－	－	－	－	＋	＋
対象(主体)への影響性	－	－	－	＋	－	＋
名詞化パターン	自立	自立	ガ構文	ガ構文	複合語	複合語

### 3. 行為連鎖モデルでの解釈

名詞化という操作は、動詞がもつ意味構造(行為連鎖)の全体あるいは一部分を切り取って、デキゴトまたはモノという名詞の概念に変えることである。

(影山 1999)

動詞の行為連鎖モデルを次のように示される。



つまり、働きかけの力(動作性・瞬時性・影響性)が強ければ、動作・行為と対象物の関係がより強い力で結ばれ、行為連鎖から切り取る(名詞化する)際、動作・行為の程度・具合などを明記するか、対象物と一緒に切り取るか、といったことが要求される。言語表現では、特定構文を必要とされるか、項との複合が求められるとのことであると考えられる。

### 参考文献

Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson. (1980). Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* Vol. 56, No. 2.

影山太郎. (1999). 形態論と意味. くろしお出版.

キーワード：日本語の形容詞、主観性、1人称省略、モダリティ、統語論

本発表で扱うのは、(1a)に例示する、なんらかの「主観性」(澤田(1993))を示す形容詞である。渡辺(1991)において、これらの主観的な形容詞は、(1b)に例示する「ひとごと」性形容詞に対し「わがごと」性形容詞に分類されている。渡辺によると、「ひとごと」性形容詞が「ずいぶん重い」のように副詞「ずいぶん」と共起するのに対し、「わがごと」性形容詞の場合は「\*ずいぶん悲しい」のように共起が不可能である。また、「わがごと」性形容詞の主語は、現在時制の場合、(2b)のように3人称が許されず、(2a)のように1人称主語のみが許される(cf.「花子は悲しがっている」)。

(1) a. 悲しい、寂しい、暑い、寒い、(遊び)たい、(本が)欲しい

b. 明るい、大きい、赤い、分厚い、重い (cf. 重たい)

(2) a. (私は) {悲しい/暑い/外で遊びたい/本が欲しい}。

b. ??/\*花子は {悲しい/暑い/外で遊びたい/本が欲しい}。

さらに、「わがごと」性形容詞は(3a)のように接辞「がる」により動詞化することができるが、「ひとごと」性形容詞は(3b)のように「がる」による動詞化は許されない。

(3) a. 悲しがる、寂しがる、暑がる、寒がる、(遊び)たがる、(本を)欲しがる

b. \*明るがる、\*大きがる、\*赤がる、\*分厚がる、??重がる (cf. 重たがる)

渡辺の一般化に対し、澤田(1993)は「わがごと」性形容詞が過去時制の場合は(4)のように3人称主語が許され、「ずいぶん悲しかった」のように「ずいぶん」との共起も可能であることを指摘している。澤田は、この事実を「感情表現においては、現在形よりも過去形の方が客観性が高い」という記述的な一般化に帰している。

(4) 花子は {悲しかった/暑かった/外で遊びたかった/本が欲しかった}。

しかし、他方で、1人称主語の場合は(2a)や(5a)のように省略が可能である一方、3人称主語は(5b)のように省略が不可能である。この省略の事実は、(5c)に例示する、長谷川(2007)で扱われている「-てくれる」の目的語省略の事実と共通している。

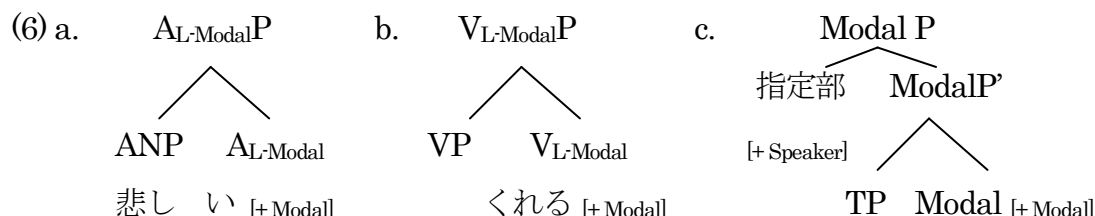
(5) a. 皆から花をもらって、(私は)嬉しかった。

b. (昨日は花子の誕生日だった)皆から花をもらって、\*(花子は)嬉しかった。

c. 彼女は(私を)助けてくれた。/彼女は\*(彼を)助けてくれた。

長谷川(2007:337)は、省略の対象となるのは、「CPシステムの指定部の要素(もしくはその主要部と「一致」した要素)」であると規定している。

こうした観察や議論を基に本発表では、(1a)のような形容詞と動詞「くれる」はそれぞれ(6a)と(6b)に示す統語構造を有すると主張する。また、長谷川 (2007) に従い CP システムに(6c)のようなモダリティを表す機能範疇 ModalP が存在すると想定する。



(6a, b)内の  $A_{L-Modal}$  や  $V_{L-Modal}$  は「語彙的モダリティ」を表し、この範疇に基底生成する要素は主観性を表す [+ Modal] の素性が与えられる。「がる」のような心的態度を表す接辞はこの素性を持つ形容詞のみを動詞化することができ、 $A_{L-Modal}P$  ではなく、 [+ Modal] を持たない AP を投射する(1b)のような形容詞を動詞化することはできない。

(6c)の Modal が持つ [+ Modal] は、probe として、goal となる同じ素性を持つ  $A_{L-Modal}$  や  $V_{L-Modal}$  のような要素を探し、それにより素性の「照合」が起こり、goal の指定部に [+ Speaker] を持つ 1 人称の要素を要求し、[- Speaker] を持つ 3 人称主語が排除される。また、この「照合」された要素は省略の対象となる (cf. 長谷川 (2007))。

形容詞が過去時制の場合、kanashi-ku-a-tta のように動詞「ある」が具現化される。本発表では、「ある」が Modal と  $A_{L-Modal}$  の「照合」を阻み、その結果 goal の指定部に [+ Speaker] が要求されなくなることによって 1 人称以外の要素の生起が許されるようになり、かつ、その要素は省略の対象にはならなくなると提案する。

本発表の意義は以下の 2 つである。第一に、個々の形容詞が持つ「主観性」を CP システムと関連付け語彙意味と統語構造の関係を明らかにすることができる。さらに、動詞化のような形態論的な事実を語彙的な意味と統語構造に結び付けることができる。最後に、本発表では、「語彙的アスペクト」(影山 (2012)) と「語彙的モダリティ」の関連性を議論し、影山 (1993) 以来のモジュール形態論の枠組みを再考する。

参考文献：長谷川信子 (2007) 「1 人称の省略：モダリティとクレル」長谷川信子編『日本語の主文現象』331-369. ひつじ書房./ 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房./ 影山太郎 (2012) 「複合動詞の形態構造と自他交替」国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」における講演 (於国立国語研究所) / 澤田治美 (1993) 『視点と主観性 -日英語助動詞の分析-』ひつじ書房./ 渡辺実 (1991) 『『わがごと・ひがごと』の観点と文法論』『国語学』165, 1-14.

Short love poems are easy to be read and understood.は語彙意味論からどう説明されるのか

丸田 忠雄 (東京理科大学)

**Tough** 類形容詞の不定詞節補文が受動文となっている(1)は学校文法、生成文法等で非文法的とされている。

(1) Short love poems are easy to be read and understood.

しかし Google 検索でこの種の **passive infinitive** 文の頻度を調べると、必ずしも容認不可とはいえないことが窺える。またこれらはアメリカ英語では許容度が高く、一方イギリス英語ではきわめて稀という事実もある。本発表では現代アメリカ英語で進行中の文法の「変遷」の一端を語彙意味論から説明したいと思う。なお参照するコーパスは COCA、COHA、また適宜 Google の検索データを利用する。

周知のように **tough** 類形容詞は、(2)の交替を示し、(1)のように、主節主語が従節受動文の主語位置と結び付けられる文は統語的に **ill-formed** とされる。

(2) a. It is easy to read short love poems. → b. Short love poems are easy to read.

しかし実態は必ずしもそうとはいえない。試みに、Google で地域をアメリカに限定して、"are easy to be used" (曖昧性なく(1)タイプの文を抽出する)で検索をかけてみると、140件ヒットした(2013.7.24日現在)。一方正用法の"are easy to use"のほうは実数321件である。Google 検索結果には **non-native** 話者の英語が含まれており注意が必要であるが、データを個別に検討してみると、おおむね **passive infinitives** も標準形と併行して用いられていることが窺える。以下は信頼のおける1例である。

(3) The water resources in your area should be enough to supply ample water to the garden plants. The ready water sources like garden wells are easy to be used for watering in the gardens. (<http://www.mightygarden.com/community-gardens/community-garden-planning.html>)

同種の例は COCA, COHA から採取できた。対照的にイギリス英語では、"are easy to be used"はわずか16件しかヒットしない。他方"are easy to use"は419件である。またイギリス英語の大規模コーパス BNC では(1)タイプは検索できなかった。

そもそも歴史的には、**passive infinitives** は近代英語で一般的に用いられていた (Fisher 1991; Anderson 2002; Jespersen *MEG* V, 17.44)。実際 *OED* にも用例が掲載されている。J. Swift の *Gulliver's Travels* には This is not easy to be obtained.が見られる。また Helsinki Corpus では19世紀後期まで用例が確認できる。したがって(1)は、文法上は可能なオプションとして英語母語話者に用意されている構文と見てよく、いまアメリカ英語に出現している事実は不思議なことではない。

中村 (1976:231) はまれに **for-to** 不定詞節が受動態の時に主語の繰り上げが起こることを報告している。中村が挙げる(4b)は、本発表が扱うデータと同じものと考えられる。



(4)a. It is easy for the room to be heated. → b. The room is easy to be heated.

注意すべきは(4a)で、for NP は従節の主語で、通常の tough 構文 (It is easy for me [PRO to read this book].) のように主節に属する dative phrase ではないことである。この補部構造の違いは、語彙意味論的には tough 類形容詞の2つの異なる意味から説明される(2つの意味については Nanni (1978) を参照)。さらに本発表は、(4)の交替を起こす形容詞は tough 類に限らないことを指摘する。

(5) a. It is necessary for something to be done. → b. Something is necessary to be done.

(6) a. It is desirable for marriages to be celebrated during Mass. →

b. Marriages are desirable to be celebrated during Mass.

問題は(4)(5)(6)の交替に関わる形容詞に共通する意味要素は何かと、なぜ passive infinitive の時に主語繰上げのような現象が起こるかである。結論の見通しとしては、これらの形容詞は命題内容を項として取る (it BE 形 for-to 補文に具現) と同時に、語彙意味的に「態」性を含み passive morpheme -en の機能も果たすことができるとする。同種の「態」性は(7)の動詞 need にも含まれていると考えられる。

(7) The car needs to be washed.

この性質から tough 類にも、主語繰上げが適用したような passive infinitive パターンが帰結するものと考えられる。

#### 参考文献

Anderson, Deborah L. (2002). Structural ambiguity in early English Tough constructions: Are child grammars deficient or simply different from adult grammars?. In *Research Centre for English and Applied Linguistics (RCEAL): Working papers* vol 8, 1-24.

Fischer, Olga (1991), The rise of the passive infinitive in English, in D. Kastovsky (ed.), *Historical English Syntax*, Mouton de Gruyter, 141-188.

Nanni, Deborah (1978) *The Easy Class Adjectives in English*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

中村 捷(1976) 『形容詞』(現代の英文法7) 東京 (研究社)

## 複合動詞「V+歩く」の統語的分析に関する一考察

キーワード：複合動詞「V+歩く」、統語的アプローチ、付加構造

### 秋本隆之

**目的と主張** 複合動詞「V+歩く」（例：カバンを持ち歩く）に関して、その特徴、及び、統語的アプローチにおける先行研究における分析を整理し、(a) 補部構造を用いた分析の妥当性、及び、(b) V2「歩く」が生起する範疇について検討する。本発表では、(a)と(b)を検討した後、張 (2006) に従い、「V+歩く」はV1の動詞句が「歩く」の動詞句に付加することによって派生されると主張し、張 (2006) が提案する分析の修正案を提示する。

**複合動詞「V+歩く」** 複合動詞「V+歩く」の特徴として、(a) V1と「歩く」がそれぞれ独自の項を取ることが出来る(1); (b) V1を「そうする」での置き換えることや主語尊敬語化することはできないが、V1に「VNする」を取ることが出来る点で、語彙的性質と統語的性質を併せ持つ(2); (c) 「歩く」の意味は文字通りの「足で歩く」ではなく、「なんらかの交通手段を使って移動する」という意味になる(5)、ことが挙げられる。

- (1) a. 太郎はいつも[カバンを持ち]歩く。  
b. 先生が（歌舞伎町を）[お酒を飲み]歩いた。
- (2) a. \*次郎もそうし歩いている。 (そうするテスト)  
b. \*先生が歌舞伎町でお酒をお飲みになり歩いた。 (主語尊敬語化テスト)  
c. 借金し歩く (cf. 借金し続ける(統語的) (「VNする」テスト)
- (3) a. タカシが全国のラーメンを食べ歩く。  
b. 太郎は通勤時ノートパソコンを持ち歩く。

複合動詞「V+歩く」の統語的分析においては、(i) V1が投射する目的語を含んだ動詞句と「歩く」が統語上どのような関係を成しているか、(ii) 「VNし歩く」はどのように派生されるのか、その派生は統語的複合動詞と同じかどうか、などが問題となる。

**補部構造分析とその問題点** Nishiyama & Ogawa (2011)は、「V+歩く」の統語的特徴(2c)、及び、意味的特徴(3)から、「V+歩く」は統語的複合動詞と“natural class”を形成していると述べ、「歩く」は主要部 Asp に現れ、前項の動詞句を補部として取ると提案している(4)。

- (4) [VoiceP Subj. [AspP [vP Obj. [v' √V1 v(si)]] Asp (aruk) ] Voice]

しかし、(i)「歩く」は統語的複合動詞とは異なり、共起出来る「VNする」が非常に限

られ、さらに「(NP の) VN “を”し歩く」の場合、容認度が下がることや(5) (cf. (6)), (ii) 「歩く」が単独で現れる場合でも、文字どおりの意味にならない場合がある(7), (iii) 統語的複合動詞の意味関係は「補文関係」(V2 が V1 の Event を修飾する)なのに対し、「V+歩く」は「様態・付帯状況関係」(V1 が V2 の Event を修飾する)である(何 2010) ことなどから、N&O (2011)が提案する補部構造、及び、「歩く」を Asp に現れるとする分析は妥当でないように思われる。

(5) 「VN+歩く」

- a. 借金し歩く    a'. ??多額の借金をし歩く
- b. 撮影し歩く    b'. ??紅葉の撮影をし歩く
- c. \*音読し歩く    c'. \*英語の音読をし歩く
- d. \*販売し歩く    d'. \*自動車の販売をし歩く

(6) 統語的複合動詞

- a. 借金(を)し始める/まくる/続ける
- b. 撮影(を)し始める/まくる/続ける
- c. 音読(を)し始める/まくる/続ける
- d. 販売(を)し始める/まくる/続ける

(7) 営業マンが取引先を歩く

**付加構造による提案** 以上の議論から、「V+歩く」は補部構造ではなく、付加構造によって派生されると主張する。付加構造による分析自体は張 (2006)によって既に提案されているが、張の分析ではV1の現れる範疇をVとしており、「VNする」の「する」が現れる範疇が不明である。したがって、本発表では、分散形態論で仮定されているような√Rootの概念を用いて、以下のような修正案を提示する。

(8) [VoiceP Subj. [vp2 [vp1 Obj. [v' √V v1(si)]] [vp2 √aruk v2]] Voice]

本分析案では(5)に提示した「VN “を”し歩く」の非文法性は、付加部からの主要部移動ができないことから説明される (cf. Baker 1988)。さらに、「V+歩く」の様態関係はvp1がvp2へ付加することから導ける。最後に本分析は「V+明かす」、「V+去る」、「Vテ+歩く」のような複合動詞の構造にも敷衍できることを論じる。

**まとめ** これまでの統語的アプローチからの複合動詞分析では、V1がV2に直接付加するような構造は提案されてきたが、動詞句が付加する構造については張 (2006) 以来、提案されてこなかった。本発表は(一部の)複合動詞に対し、動詞句付加構造分析を支持するものであり、複合動詞の構造にはある種の多様性があることを示唆する。

**参考文献** Nishiyama, K. & Ogawa, Y. (2011). Auxiliation, Atransitivity, and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds. 『神田外語大学大学院紀要 言語研究 特別号(2)』: 239-291. 張超 (2006) 『中国語との比較に基づく日本語の複合動詞の研究 —動詞句連続構造との並行性の観点から—』博士論文, 広島大学.

モノ名詞に付加して動作解釈を引き出す「ひと」について  
(キーワード:「ひと」、クオリア構造、複雑述語、強制(coercion))

伊藤たかね・杉岡洋子・由本陽子

日本語では、モノの数量を表すのに、数詞を直接名詞につけることができず(「\*一鉛筆」)、類別詞(「一本の鉛筆」)や計量詞(「ひと箱の鉛筆」)を用いる。数詞である「ひと」は本来計量詞についてモノの量を計り取る働きをもつ(「ひと匙の砂糖」)。本発表では、「ひと」がこのようなモノを計る用法以外に、コト(動作)を計り取る用法(以下「動作読み」と呼ぶ)を持つことに注目し、一見モノを表す名詞についているように見える「ひと+名詞」が複雑述語形成やクオリア構造に基づく強制(coercion)などによって動作読みとなり得ることを示す。

動作読みの例としては、以下のようなものが挙げられる。

- (1) a. ひと+動詞連用形名詞: ひと泳ぎ(する)、ひと歩き(する)(影山 1993)  
b. ひと+単純事象名詞: ひと風呂(浴びる)、ひと仕事(する)

影山ら(2012)にあるように、計量詞として用いられるのは、容器を表す名詞が多い(「ひと箱のみかん、ひと袋の飴」など)。これに対して、動作を計るときには容器のような表現を用いることができないため、動作を表す語に直接「ひと」が付加されると考えられる。ただし、形態的には「ひと」は名詞にしか付加できず、動詞に付加することはできない(「\*ひと歩く」)ため、(1a)のような動詞連用形名詞や、(1b)のような事象名詞が、「ひと」と共起する。これらの動作読みにおける「ひと」には、数詞として「一」を表すというよりも、動作に有界性を与え「ちょっと、軽く」といった意味が前面に出てくる。

(1)の例では、「ひと」が付加される名詞自体が動作を表しているが、興味深いことに、本来的にはモノを表す名詞に付加されているように見える例がある。

- (2) a. ひと汗かく、ひと息つく、ひと声かける  
b. イディオム: ひと肌ぬぐ、ひと泡ふかせる、ひと皮むける

これらの例では、「ひと」は、形態的には名詞に付加されるが、その名詞の表すモノの量を計っているわけではない。(2a)ではN+Vの表す動作(「汗をかく、息をつく」)を、一回、あるいはちょっと行うという意味をもち、(2b)においても同様である。つまり動作読みの「ひと」は動作の量を計り取るものであるため、NだけでなくN+V全体をスコープとする。これらの用法には、助詞が介入できないという特徴がある(「\*ひと汗をかく、\*ひと肌をぬぐ」)が、「ひとN+V」が複雑述語として一塊をなしていると考えれば、助詞が入れないことが説明で

きる。(cf. 「\*かいたひと汗、?\*ついたひと息」「\*ひと汗さっきかいた、\*ひと息やっかついた」)。

一方、名詞が道具や身体部分を表す例もある。

(3) ひと箸食べる、ひと刷毛塗る、ひと目見る、ひと口食べる

この場合も、「ひと」は、箸や口を数えているわけではなく、「箸で食べる、口で食べる」などの動作を計り取っている。しかし、(2)の例とは異なり、助詞や副詞的要素が「ひと N」と動詞の間に介在する用法が可能な場合もある（「ひと口で食べる；ひと口あわてて食べる」）ため、「ひと N+V」が複雑述語を成しているとは考えられない。さらに(4)のように動詞を伴わずに用いることのできる例があることから「ひと N」だけで動作をあらわしていると言える。

(4) a. ほんのひと刷毛で明るい気持ちになる ((化粧品を)ひとへけ塗ることで)

b. ひと目でわかる／ほれる c. ひと息で吹き消す

d. ひと足ごとに立ち止まる e. 最後のひと刷毛が、顔の表情を豊かにする  
まず(3)では、「刷毛」や「目」は、本来モノを表す名詞であるが、名詞のクオリア構造（「塗る」「見る」といった目的役割）から動作を読み取る形で強制(coercion)が起きている。これは、動作の量を計り取るという「ひと」の意味的な選択素性により説明できる。(3)では、強制された動作の意味が動詞によっても表されていることになるが、(4)の例は、動詞を伴わずとも「ひと N」が動作を表すことができることを示している。

最後に、次のような動詞の連用形を計量詞として使う例も、動作読みと関連づけることができる。

(5) ひとすくいの砂糖、ひとつまみの塩、ひとかかえの本

これらの例では、すくったりつまんだりする動作が「ひと」で計り取られ、その結果がモノを計る計量詞として用いられていると考えられる。

以上、本発表では「ひと」には継続相の事象に有界性を与える機能があり、その用法によってモノ名詞と結合した場合にも名詞のクオリア構造による強制が起こると考えることで、「ひと N」の多様な用法が説明できることを示す。

主要参考文献： [1]影山太郎 1993 動詞意味論 [2]影山太郎、眞野美穂、米澤優、當野能之 2011 影山太郎(編)『名詞の意味と構文』第一章「名詞の数え方と類別」 pp.3-35. 大修館書店

# 動作動詞句を形成する「形容詞ク形＋する」の性質と構造

キーワード：形容詞ク形、する、動作動詞句、補部、付加部 田川拓海

## 1. 目的と主張

現代日本語（共通語）において、「形容詞ク形＋する」という組み合わせで状態変化動詞句を形成する派生は非常に生産的である。

- (1) a. 部屋が明るい。
- b. 太郎が部屋を明るくした。

一方で、「形容詞ク形＋する」という組み合わせで、動作(activity)動詞句を形成するように見えるタイプが存在する。

- (2) a. 太郎が花子に優しい。
- b. 太郎が花子に優しくした（≡優しく振る舞った）。

このタイプは(1b)のような状態変化タイプに比べそれほど生産的ではなく、また(2a)と(2b)では(1a, b)の対応と異なり項の数に変化が無いなどの特徴を持ち、両者を「形容詞ク形＋する」という形式上の同一性からくくることは難しいのではないかと思われる。

本発表では、(2b)のようなタイプについてまず記述を行い、1) 動作タイプが事象に限界点を持たず、動作動詞句を形成していること、生起可能な形容詞に制限があること、などを明らかにし、2) 動作タイプの統語的分析においては形容詞ク形の部分が「する」に対して補部になっているのか付加部になっているのかという意味と構造の対応に関する問題を提示することを示す。

## 2. 動作動詞句を形成する「形容詞ク形＋する」

以下に見るように、「優しくする」タイプは限界点を持つ動詞句と共起する「～(間)で」句と共起することが難しい。許容可能な場合も、その解釈は動作動詞句が見せるいわゆる“開始読み”になることから、(3a)の「形容詞ク形＋する」は動作動詞句を形成すると考えられる（以降、「動作タイプ」とする）。

- (3) a. 太郎が花子に 二日間/#二日(間)で 優しく/厳しく/冷たく した。
- cf. 太郎が 二日間/#二日(間)で 走った。
- b. 太郎が部屋を 二時間/二時間で 明るくした。

また、この動作タイプには状態変化タイプと異なり、限られた形容詞しか共起できない。(4)に見るように、「明るい」は(4b)が可能なことから意味的には動作タイプを形成可能なように思えるが、実際は不可能なようである ((4a))。

(4) a. \*太郎が明るくした (=明るく振る舞った)。

b. 太郎が明るく振る舞った。

このような非生産性は“語彙的”な特徴として知られており、「形容詞ク形+する」が句として振る舞うことから考えると、不思議な性質である。

(5) 太郎が花子に 優しく は/も した。

### 3. 動作タイプにおける形容詞ク形は補部か付加部か

動作タイプは機能範疇を含む形容詞ク形 (Nishiyama(1999)) からなることや、(5) のような振る舞いを見せることから統語的に句を形成していると考えられる。

しかし、形容詞ク形部分と「する」の構造的関係については一種のジレンマが生じる。すなわち、形容詞ク形部分を省くと文が成立しなくなることからは形容詞ク形部分は補部であると考えられるのだが、意味的には「振る舞う」のような意味を表す「する」を修飾する様態副詞と考えることもでき、様態副詞と並行的に分析するのであれば付加部になっている可能性も存在するのである。本発表では、両方の可能性について、かきまぜなどの現象から検討する (cf. Fukumitsu(2001))。

### 4. おわりに

語形成のレベルで形容詞を動詞にする手段には様々なタイプが存在するが (杉岡(2009))、「-まる/-める」や「-がる」などと異なり、「形容詞ク形+する」は同一の形式で異なるタイプの動詞句を形成する点が特徴的である。「形容詞ク形+する」の研究を進めることによって、形容詞の意味的タイプやスケールとそこから派生される動詞(句)の性質といった問題にも新たな知見や視点をもたらされるものと期待される。

#### 【引用文献】

Fukumitsu, Yuichiro (2001) “Covert incorporation of small clause predicates in Japanese,” Maria Cristina Cuervo et al. (eds.), *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 3. 251-266.

Nishiyama, Kunio(1999) “Adjectives and the copulas in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183-222.

杉岡洋子(2009)「第6章 形容詞から作られた動詞」影山太郎(編)『形容詞・副詞の意味と構文』191-222, 大修館書店.

日本語の主語： 項と格と文構造

長谷川 信子  
(神田外語大学)

文法記述において「主語」は、基本中の基本と考えられており、特に、英語（ほか、ヨーロッパ言語）では、生成文法のみならず伝統的文法記述や学習文法においても、「主語」については「それなりの合意」があるとの想定である。一方、日本語については、伝統的日本語（国語）文法でも、生成文法においても、「主語」についての共通した認識がない。「主語不要論」さえある。どうしてこのような大きな認識の違いが言語間で存在するのだろうか？言語は人に等しく与えられた能力であり、その具現がたまたま英語であったり日本語であったりすると考えるのなら、そして、言語学が言語能力の記述・説明を第一義的な目的とするのなら、この疑問にもう少し体系的な討議が欲しい。ここでは、「主語」を、(i)述語の意味と「項構造」、(ii)文構造における「主語」の位置と格、(iii)話者の視点（モダリティ）や発話行為におけるプロミネンス、の観点から考察し、それらが統語構造における機能範疇の vP、TP、CP の指定部に関わる機能と統語操作に対応すること、言語間の違い（特に、主要部の位置の違いと明示性）が、(ii)と(iii)で採用される操作に関わることを論じる。

(i)については、述語の意味や概念が構造化されるレベルであり、（それな、人の認知能力や概念構築の普遍性と関わり）、vP レベルでの「主語」についての言語間の違いは基本的には「ない」。しかし、言語間の違いは、そうした(i)「意味概念構造」が、言語として、「発話の場や状況認識」を組み込み、「線的に表現される」際に、つまり、(ii)「時間軸や相」の組み込みとして IP レベルと、(iii)「発話行為の具現としての文タイプや話者の認識の発現」の組み込みとして CP レベルと関わる際に、言語間の違いが表出する。英語タイプの言語が(ii) TP レベルでの操作を多用するのに対し、日本語タイプの言語は(iii) CP レベルの操作が豊富であり、それが、「主語の認識の違い」の背景にあると思われる。なぜ、(ii) TP 対 (iii) CP という違いを言語が示すのかについては、統語操作の本質が「抽象的な要素・構造」の「発音可能な線的具現化」にあり、その際に「主要部の位置」が重要な役割を示すことから、主要部前置言語と後置言語の観点から考察する。現時点では「Speculation」以上ではないが、今後の統語研究の作業仮説とはなり得ると考えたい。